

てヒトと対照的だが、第1中手骨間を通る枝がはっきり存在している一方、浅掌動脈弓の発達が弱く中手骨遠位端における貫通枝と動脈鎖が主要路になっているなど、系統発生上の動脈系プランと特殊化が混在していることが確かめられた。

計画：9-9

下顎洞毛を支配する神経の分岐走行の肉眼解剖学的研究

高橋 裕 (防衛医大・解剖二)

ラットの顎舌骨筋神経は顎舌骨筋、顎二腹筋前腹、下顎骨間洞毛とその周辺の皮膚に分布にする。オトガイ神経はオトガイ洞毛とその周辺の皮膚に分布する。どれも三叉神経第3枝下顎神経の下歯槽神経に由来する。これらの枝の分布先が霊長類進化過程でどう変化してゆくか神経鍍銀染色資料を手術用顕微鏡下で肉眼解剖学的に精査した。資料は(ラット)、食肉目(イヌ、ネコ)、食虫目(モグラ、リュウキュウジャコウネズミ)、原猿亜目(コモンツパイ、ワオキツネザル、ブラウンキツネザル、スローロリス、ショウガラゴ、オオガラゴ)、真猿亜目(サキ、クモザル、ギニアヒヒ、カニクイザル、ニホンザル、チンパンジー)である。下顎骨間洞毛はラット、イヌ、ネコとコモンツパイに見られた。カニクイザルの30体中5体5側ではオトガイ洞毛の下方に顎舌骨筋神経の分布する洞毛が認められた。顎舌骨筋神経皮枝はスローロリス3体中2体とクモザル1体で認められなかった。これらの資料はアルコール性固定液中に保存されていて鍍銀染色が悪かったので皮枝の有無は確かではない。オトガイ神経の分布するオトガイ洞毛はどの個体も持っていた。リュウキュウジャコウネズミでは4本の長い洞毛が1列に、ツパイとモグラでは大まかながら2列に、ショウガラゴでは不鮮明ながら4列に並んでいた。配列がさらに不鮮明な他の種でもオトガイ神経洞毛枝の分岐の走行に沿って洞毛の毛根は埋まっていた。

観察結果を総合して、次のことが想起される。

1) 下顎間洞毛が齧歯目、食肉目から原猿亜目、さらに真猿亜目にかけ消失するのに伴い、洞毛枝も消失する。皮枝も分布域を退縮するが顎舌骨筋神経皮枝としてヒトでも出現することがある。

2) オトガイ洞毛は食虫目から原猿亜目にかけ規則的配列を無くして働きの違いを同わせるが洞毛

は消失せず、オトガイ神経皮枝はヒトまで残る。

3) 洞毛周囲の筋を支配する顔面神経は走行過程で前述の洞毛枝や皮枝と線維を交錯させる。

ヒトに出現することのある顎舌骨筋神経皮枝の系統発生的由来が明らかになった。

計画：9-10

ダイアナモンキー (*Cercopithecus diana*) の気管支分岐、肺葉区分、肺動・静脈分布。

中久喜正一 (東農工大・農・獣医解剖)

江原昭善 (椋山女学園大・生活科学)

京都大学霊長類研究所所蔵のダイアナモンキー (*Cercopithecus diana*) の肺の気管支系および肺動・静脈系に celluloid の acetone 溶液を注入して鋳型標本を作製し、「哺乳類の肺の気管支分岐の基本型」(中久喜、1975)に基づき、気管支分岐と肺葉の関係および肺動・静脈分布について調べた。

気管支分岐を見ると、左右の気管支の背、腹、内、外側から背側気管支系、腹側気管支系、内側気管支系および外側気管支系の4気管支系が起こる。右肺の上葉は背側気管支系の第1枝で、中葉は外側気管支系の第1枝で、副葉は腹側気管支系の第1枝で形成され、残りの気管支は下葉を形成する。左肺では上葉を形成する背側気管支系の第1枝を欠如し、中葉は外側気管支系の第1枝で形成され、副葉を形成する腹側気管支系の第1枝を欠如する。残りの気管支は下葉を形成する。従って右肺は上葉、中葉、下葉および副葉から成り、左肺は2葉に分かれた中葉と下葉から成る。

右肺動脈は右上葉気管支の腹側を通り、右中葉気管支の背側を越えた後、背側気管支系と外側気管支系の間を右気管支の背外側に沿って走り、各気管支の外側または背側に沿って走る肺動脈枝を分枝する。左肺動脈は左中葉気管支の背側を越えた後、右肺動脈と同様に走り、肺動脈枝を分枝する。肺静脈は主として各気管支の腹側または内側で気管支と気管支の間を走る。

計画：9-11

原猿類手首関節の構成

山田 格 (国立科学博物館)

Jeffrey. H. Schwartz (ピッツバーグ大学)